

繪本西遊記
初冊
九

遠21
2500
40-9



2500
40-9

世

本貸所

東京牛込細工町
誠光堂

池田屋清吉

凡そ農工商も夫々の職分を業子固て拵用の只物をそと
 今も當心言て及一叙之然るに世世家奉の巻中小酌の白席
 酒の種々の書入又ハ形さ覺來る。木偶人或ハ見苦き
 其職分の道具之疵付のハ併と云。著述拙く筆業者の誤り
 池田屋常は是と叙記然不直は一固て素代りて諸君子好く
 磨石山人識

繪本西遊記初編卷之九

前章之下

由亭主人編次



去りても八戒ハりの婦人にいさなれ終て内堂に至りて問てり
 々の婦人いそれの女ををいし我に配はるやと云婦人曰く
 我もは事いせと決せん大女に配まハ二女恨むべし二女に配
 まハ三女うらむべし三女に配まハ則大女うらむん是といはれ
 計るべしや八戒の曰く若かんのてうたがバ二人の女ひとりわが
 妻とまさんいふ婦人の曰く你胡說事と云今とたうれ吾目
 計あり今三人の女とけしと嘆び来らん你手帕を以て面を
 蔽ひ暗合手にとくららん女と你が妻と定むべし八戒是をん

繪本西遊記初編

三八
入堂
戀々
女々
戒々



眞々

愛々



憐々

八戒

西遊記

こゝ手帕を以て 臉をかくし 両手をひろげ待たせり 其婦人
声を高く 我女真く愛く 憐れくも 申す 申す 女婦を定め
よと 呼り ぬい 忽蘭麝の薫り 芬くと 吹来り 是や 仙女の 来り ぬ
と あり され 八戒ハ 心神中天に 花び 身ま びれ 身ま びれ 西に
よ びれ きて 柱と ども 東に きて 壁に 踏 着 地に 倒れ ぬ
陽 氣 さん ちら び ども 皆 申 滑 とも ども 婦人 笑 入 て 曰 け ば
い ども 皆 謙 讓 ぐ り とも ども 你 を 申 け ば 吾 別 々 とも ども
と あり 三人 の ども ども 巧 制 とも ども 汗 衫 あり ば 汗 衫 三 つ とも ども
控 せ ぬ 你 暗 け とも ども 身 に 穿 せ ば 其 汗 衫 と 制 とも ども ども
と ども ども 你 に 配 とも ども 八 戒 曰 け ば とも ども とも ども 我
とも ども 三 個 とも ども 穿 得 とも ども 三人 の ども ども とも ども 我 妻 と とも ども

い ども とも ども 再 ども 大 手 と とも ども け ば 探 り 需 とも ども 果 とも ども 一 つ
の 汗 衫 の 物 とも ども とも ども とも ども 身 に 纏 へ 忽 然 止 ち 地 に 倒 れ 原
本 是 汗 衫 に あり とも ども とも ども 繩 と 糸 條 とも ども とも ども 引 傳 とも ども
動 とも ども とも ども 頃 け 時 東 方 正 にも 白 かん とも ども とも ども 三 藏 師 弟 三人
睡 とも ども とも ども 普 とも ども 四 方 とも ども とも ども 昨 あり 高 堂 玉 擗 一 宇 とも ども
とも ども とも ども 見 松 樹 の 下 に 綱 とも ども とも ども 風 の とも ども とも ども 外 にも とも ども
者 とも ども 三 藏 と とも ども 師 弟 三人 呆 果 我 們 鬼 の 為 に 欺 とも ども
とも ども とも ども とも ども とも ども とも ども とも ども とも ども とも ども とも ども とも ども
たり

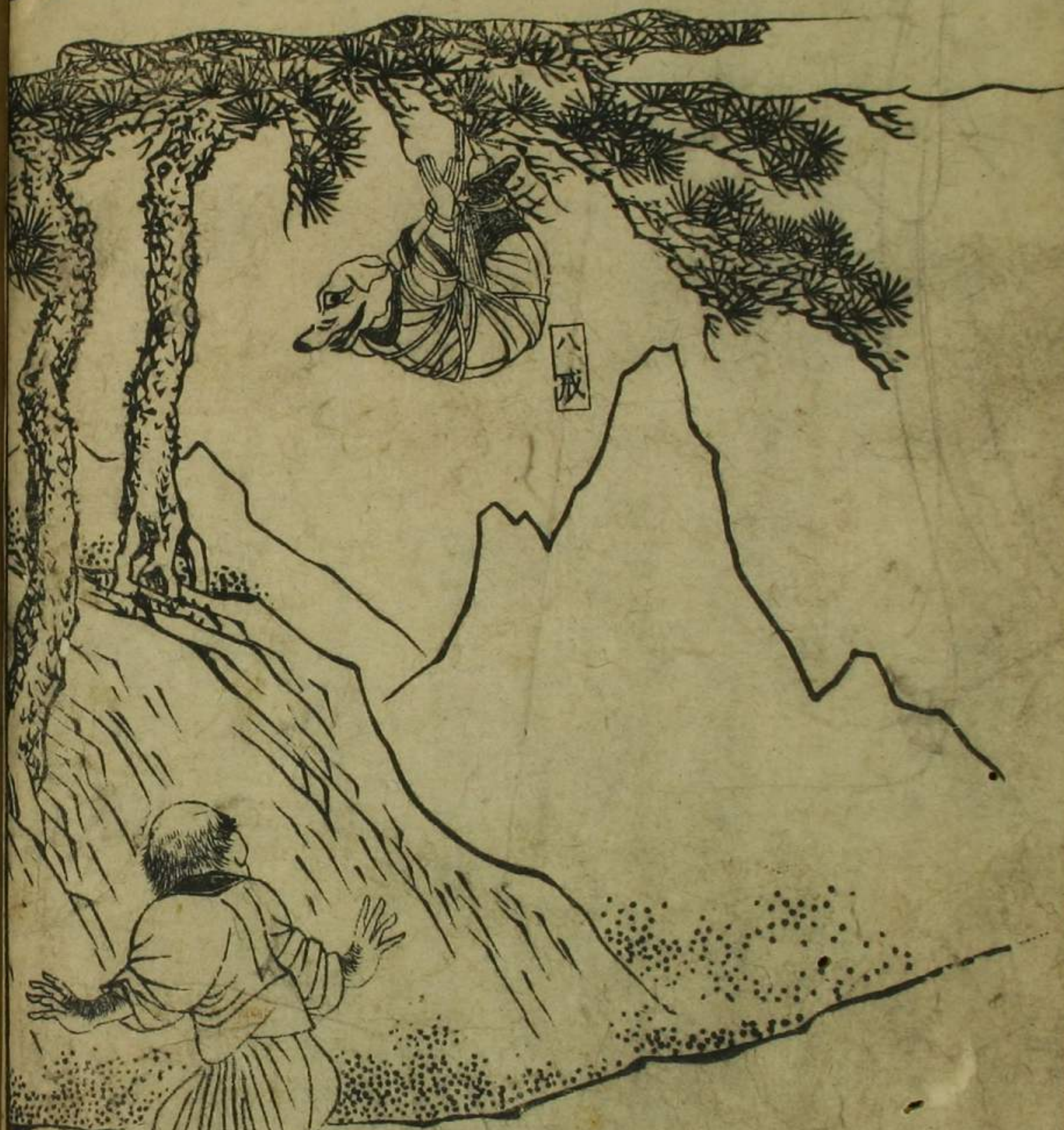
黎山老母不思凡 南海菩薩請下山 普賢文殊皆是客

八戒縛樹
やくんごうをきりて
せんびとくせんはと
 慚愧前非



悟空

三藏



八戒

沙悟淨

化成美女在林間 聖僧擔漢禪機定 八戒貪淫劣性頑

從此洗心須改過 若生怠慢路途難

三藏是と讀終く合掌して礼をばはるゝ忽林の内は声つりて
師よ我を救ひよくあるやと叫入れば師弟三人かゝるに
行くかれば八戒投條の繩にかざり付樹の上へ吊らげり
汝悟淨吐き繩を解れと下し樹の上よかけり帖と指
ざりてもぐく示し教ゆれば八戒文に慚愧に絶ど番杖禁を
礼終し再び行李と背負供をさしきりて皆去られて大
路にひびくひびくをききし人

萬壽山大仙番故友 五莊觀行者竊人參

ゆきくして萬壽山といふ高山に登りてふたの山のきりたがらに
松拍森くと生ぬきり層巒疊々岨たり山中に大ききなる寺あり
五莊觀と名に三藏馬より下て山門より入るゝ二人の童子
と出れと入りて問く曰く長老ハ大唐より西天に往く程と
ととりて入る唐三藏とていふやとやと或や三藏を驚く曰く貪僧
則是より仙童のほしてこれを知りて入る二童子曰く我師ハ
元師混名と世同君とやに仙人とていふ前日ハ始天尊の講
により上清天彌羅宮におりしとき孫の三藏いふやと或は
ととらばはまらぬやと或はに分付るやと老師且入り休まらぬ

登萬壽山
入五觀莊



萬壽山福地
五庄觀洞天



中々れば三藏大さなれよ後こひ三人の弟子と為るも客殿に於て
齊飯を調へ喫し後二人の童子三藏に向ひて曰く我而長
老とをとははぬいをんらとて菓子二枚とをいれり
まいつせんとて房中に入し兩個の果と丹盤に盛りて三藏の
持せり三藏是を刀で切らば生れぬといふ三日もさるも
さう三藏大さな驚き今歳豊に五穀よく熟しるに何を以
て依らんも人を喰ふや童子の曰く長老怪しき後ふとたうれ
是は人參果とて樹にむとひる菓なるもよく嘗むとて
ももれど三藏曾て信しむら山室本の上にとりまじし生じると
りらんやと病をまじく避むるに二人の童子もせんうたうたうと
房中へ持くり二人相傳てやういはい人參果は二十年ぶいてた

と多き又三千年うて果をむとひ又三千年うて初て
熟と一とひ是を喰ふ者ハ四萬八十歳の壽を得る得る希有
の珍菓なりとてこの遠唐僧くる靈菓なる事と志す
喰ふ事ははじむと我と喰ひ盡さんとは青高く喰ふあり
さゆと八戒壁のさきたありて始終のさびゆとて忙し行者
は向ふくやあるは人參果とらふも成りたるう行者の曰く
我其名をよめんとていさうと形ちをんをいせと食ふ者ハ
長壽がさうはじとて傳へ今にけ果ありや八戒の二童
子云く事と物傳へ你隱身の法とほむ二つに果を
偷し我もあさく喰へりゆとて行者せめて我は菓とぬを
とらんと何よりとて我兼く事あり人參果ハ今



三藏



二童
進三
藏人
參
慕

...

らひく落本にあふく拈水にきふく化し火にあひく焦らん
土にあふて洗むとさうい菓とさうい金のあらもんはさうさ
ばとて暗に房中に入るやるに二人童子と外に出る牖の上
二尺むらりの金擊子とかけさう行者是る人參果と打落
と具さうんとさう下して一島の提後園にまき出く果を見
もは一株の土樹葉ハ芭蕉のどく其長板千尺枝上に二十余
の人參果形も出形もやその嬰子のどく頭とさうはさう
熟う行者樹の枝に上りかの金擊子と打て敲き落し
まうら地中の沈とさう行者是とさう其奇なると感し直綴の
襟とひきさして三個の菓とあかしく懐くしてさうの妙悟海
と八戒に分らさく入皆收ん是と吃し一人の童子是を見て

大さくの驚きわざ三藏の前にまき罵てやさうハ你三人の
弟子吾師父の秘置も人參果と偷と吃ハ你はまを知り
たる三藏やと驚て曰く人參果とさう童子湯やさう嬰
子はくつらばや吾はま何のなるか知る怪しき果と偷とさう
いさ只今吾これとれとて大音に三をさうはさう悟
淨守てやさう今師父のまき我くとさうハ果して人參果
の事かさう行者の曰く是飲食の小事なり只我知らんと
さう何の事かさうとてさう三藏の前を跑行る

鎮元仙趕捉取經僧

孫行者大闹五莊觀

は三藏三人の後まにむらハ你們誰う人參果と偷さうや八戒



三從者謀 盜人參菓



沙悟淨

父レガトツキキ悟空

八戒

どうしてと答曰くこれらと争うのゆゑを尋ねて知うと云ふ行者は
と答ひておぼえはば吃くと噴出し笑ふ童子指さしてかの笑ひける
者こそ人參果を偷まらうと行者の曰く笑教へ我生質
你菓子うらの笑まらうと我もいふと怒がふとたうれ三藏
の曰く後身比白出家人よは夜や殊に偷まらうと云ふ
言しと四強へきは何ぞ修りて中ぞや行者師父の言ふ
理りるとぞて我も笑と修りて中八戒は果を吃りて
望むより吾この菓三個と落して三人に分ち喰ひて
子の曰く你もこの修りてと云ふと云ふれ你也らと偷りて三つと云ふ
云ふ八戒をぞ守りて行者と恨めて曰く你我の事とあると
却て你の二つを喰ひてならん行者んよはりては童子

もやうといふきかゝる菓子と三つ四つと云ふなまはとて何ふどの
事うづらん索性は樹を引倒しさまのゆゑと云ふんと忽
ちち一根の毛と抜く行者と云ふ其所を産せしめ奉りハ
人參園に飛行き金箍棒を振て枝もまよとてく人おあし
推山移嶺の神通と云ふかの大樹を一推よが倒せば遠人
多果のとも皮地下に沈むと只一個ものるものは行者か
地よと云ふ修りて旧のにおいさぬりてらぬ津にてたうたう
け時二人の童子さうやきてゆく向より二人の者とも一言の
答もたう黙して在り或人參樹高く赤紅きより我
軍が扱へたぐるも知るべし今一交責は可あらんを両
人いづく後園に出く是をんまのにおひよとて樹の倒に

沈地
樹靈
悟空
倒





おたをれ菓へ一個も入んぞれば二人の童子肝と償へこれ
かきと毛臉和尚のまをさかすべし渠等四人とて置て師
父のゆりまを待てけいりまを待てけいりまを待てけいりまを待て
殿の門と撲的とぞう外面より罵てやるるハ你等毛賊人參
菓と偷とくは又仙樹を推倒する何のちまひどや其所ふ
らうそ我師父のうらうらまを待てけいりまを待てけいりまを待
し房中ふらうらうら三藏これぞ思くゆく行者とて又你ら
菓子をれとて食ひてさあふたかのかの樹とて倒れたるや
行者の曰く師父を安んじとて我にやうせまんとて既
月とら果ててとらけころにたうゆもハ行者耳の内より金
極棒とてとらけ門上よむいといとびまのけハ門の扉忽

か嘲的といらうら忙ぎ師父を請く門とて馬にかきのせ
ハ戒ゆ悟淨後に引とて道を進きて馳うらうらとてに行程の
五十余里と走る所よ一人の行脚出まらう三藏にけいりてや
らうの長老いづく往まらや三藏の曰く貧僧ハ東土の者西天に
往く徑とていらいまらかの行脚の曰く長老東よりまらむら
か身道が住所萬壽山五莊觀と過く本まらう行者これと
やう忙ぎ前にとて答て曰我門曾たやのふと通る
らばはけの行脚行者とてとてとてとて你這邊推我誰とて
五莊觀の大仙鎮元師ハ我らう你人參樹と打倒ハおれを
まらと進れまら快く回うて吾本と返とてハ行者大まら怒
棒と引けハおかむる大仙忽ら本相を現し塵尾とてとら

五莊觀の大仙鎮元師

一

經云西遊記卷之九



經云西遊記卷之九



鉄棒とうけら抱きの袖さいらき四人の僧と馬とに引つて
提げ観中にゆる従ふに令とて三藏をばしめ四人の僧と柳
の本を傳う付龍皮とを化れる七星鞭とをさし出さし童子
令じて是を打ちむ童子の鞭を取て向く曰く是れ何もの僧
と打ちむきや大仙の曰く唐三藏吾に不遜なり是も三藏より
おろしむし行者是とぞて声と揚ぐ曰く先生羞ひあつ
菓子と偷し樹を倒したるをぞとく我より師又とゆはく是
我さおろし大仙あつて這猿猴却る所は理ありと行
者う腿を三十鞭うじりむ其時行者腿をさむて鐵とは
只童子の打ちむをぬに日既に西に沈むぬに明日再び斬
断しとをまゝ裏面にへく其後いふ人声は三藏の両眼

うり候と流し你等さあべのこころひと引せ我を帯
累にほてかゝる罪とまゝむいひしては不をのうれおんや
行者曰く師又かゝるむいひをま我今救ひ出さし
なすいと縛り素とをなすく脱出三人のいすしむさるふとや
く解柳の枝に個と折く素とを縛り付舌と嚙て鬼と
唱へうの枝に吹かれバ忽ち多て三藏師弟四人が像と化し
たりる行者今へん安しとて西に向ひくまうりる聖朝大仙
再び殿上より出童子の令し今日四人とも三十鞭を打ちと
て先三藏よりおろしむ八戒の悟降とて行者と打ちぬ不
思議や今も在り四人の僧忽ちまらなすと柳の枝とをりた
る大仙是をかく孫悟空實に神通とほく我をさし扱ふ事



海火



鍋油打破 脱身行

一言不...

うんと雲に花の須臾のるに追まら孫行者はぐく(まき)二母(ま)金(かね)參(さん)
樹(じゆ)を返(かへ)とぐくとみわれ行者八戒(はつがい)悟(ご)降(か)三人(さんにん)ひじくとくくと
大(だい)仙(せん)と中(ちゆう)にえくらお殺(ころ)さんとひいらまらる大(だい)仙(せん)かしも騒(さわ)げん再(また)
油(あぶら)と牢(らう)きこて四(し)僧(そう)馬(ば)供(ぎやう)に引(ひ)けく観(くわん)中(ちゆう)に花(はな)ゆり油(あぶら)の中(ちゆう)より拾(ひろ)
出(で)しての索(さく)とてかづら衆(しゆ)仙人(せんじん)に命(いのち)じて庭(てい)前(ぜん)に大(だい)鍋(なべ)を居(ゐ)る油(あぶら)を
たぐ孫(そん)行者(ぎやう)と金(かね)煎(せん)にせんと油(あぶら)の煮(に)るを待(まち)おらり行者(ぎやう)を中(ちゆう)
かひたるへ我(われ)はけい久(く)く洗(せん)澡(そう)せん幸(さい)この油(あぶら)と行(ぎやう)水(すい)はばらる
よからんとおのひとじがけ大(だい)仙(せん)とる者(もの)をれいふかる法(はふ)をつひ
我(われ)をめいろうとせんも斗(と)とぐじとんは油(あぶら)を試(たま)く後(のち)我(われ)自(みづか)ら洗(せん)湯(たう)
せん 側(かた)る大(だい)石(いし)と行者(ぎやう)とを本(ほん)牙(が)の空(くう)中(ちゆう)にえく油(あぶら)鍋(なべ)とのど
きわらり口(くち)は油(あぶら)燒(や)燻(く)り黒(くろ)烟(えん)う脂(あぶら)くとえ上(あ)るほどに童子(どうし)二(に)更(ま)

とよりて行者とかきあげんとれるに其(その)重(おも)きま本(ほん)盤(ばん)石(いし)のどじ
後(のち)に二十四(にじゅうよ)人の仙(せん)人(じん)あつまりてやりくはま上(あ)げらの油(あぶら)鍋(なべ)お
入(い)る五(ご)方(かた)の鍋(なべ)の底(そこ)忽(たち)ち破(やぶ)れ燒(や)燻(く)る油(あぶら)四(よ)方(かた)の花(はな)を
傍(かた)に在(あ)り仙(せん)人(じん)遠(とほ)臉(おほ)もも足(あし)も燒(や)たれあとしてうごめきよう
よく見(み)れは行者(ぎやう)はなきて一(いつ)塊(くわい)の大(だい)石(いし)中(ちゆう)にあり大(だい)仙(せん)これとて
大(だい)きこに怒(い)り儘(まま)我(われ)鍋(なべ)と打(うち)碎(くだ)きたるうそ安(やす)かぬ鍋(なべ)を改(か)め
て唐(たう)二(に)藏(ざう)を前(ぜん)殺(ころ)し一(いつ)出(で)氣(き)とまるとして彩(いろ)の鍋(なべ)とえ出(で)こ
せ再(また)び油(あぶら)と燒(や)んとは行者(ぎやう)は体(たい)とて色(いろ)に空(くう)中(ちゆう)より下(くだ)り
大(だい)仙(せん)にむらひれとは先生(せんせい)怒(い)りを止(や)めまへ吾(われ)先(ま)に小(せう)便(べん)急(きゆう)るり
故(ゆゑ)表(ひら)料理(り)の鍋(なべ)と擇(えら)ぶとよとて小(せう)用(よう)に行(い)くなら師(し)又(また)とひて
我(われ)と鍋(なべ)に入(い)るまへ大(だい)仙(せん)大(だい)きま多(おほ)び你(なん)体(たい)に神(かみ)通(つう)り吾(われ)人(じん)參(さん)

入(い)る百(ひゃく)三(さん)十(じゅう)三(さん)の節(ふし)

トシ



慶州



行者騰雲到東洋海

本庄邊言

1

樹と返すは我もやうと你と思ふの約とたゞせん行者の曰く大
 仙我師又のいほしめを免しむる我かきばん参樹と治し
 さん爰におもく大仙と三藏を解しは八城の悟海も共に索
 と解き正殿に清くぬまひ三人收むとわざりは時に三藏行者
 に向ひ你いふところの樹と活さんや行者曰く我今東洋海に
 行く善く三島十洲とめぐると行くの仙人商量とて起死回
 生の法と求めかきばんは本と醫しとさんと大仙三藏の二日の
 暇とを以船斗雲お騰り東海にこてをまよりたり

繪本西遊記初編卷之九終 油漬

